

1876 年における国文学の胎動  
 ——明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論 (11) ——

A Sign of “National Literature” in 1876  
 ——A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State” (11) ——

大本 達也\*  
 Tatsuya OMOTO

Abstract

This paper aims to clarify the elements which will build Japanese National Literature related to the publication of *An Outline History of Japanese Education* (1876). First, we will assess the meaning of the Universal Expositions for Japan in the early Meiji era. Next, we will discuss the publication process of this book by the Japanese Department of Education. Third, we will interpret the concepts of “literature” in the book.

キーワード: 万博、文部省、*An Outline History of Japanese Education*、日本教育史略、  
 田中不二麻呂、ダビッド=モルレー

はじめに

本稿は各論3シリーズ・国文学論の第4稿・各論3-4である(次ページの全体構成表参照)。1876(明9)年、米国独立100周年を記念したフィラデルフィア万国博覧会(国際博覧会、以下「万博」)が開催される。同万博出品のために、同年、文部省編集の*An Outline History of Japanese Education*がニューヨークの出版社・D. Appleton and Companyから刊行される。本稿ではこの書物をめぐって、いづれ国文学(national literature)を形成する諸要素が育まれていく状況を考察する。

本稿の構成はこうである。1では、新国民国家(nation state)・日本における万博の意味を考察する。2では、文部省の設置から*An Outline History of Japanese Education*の発行にいたるまでの経緯を探る。そして、3では、同英文書における“literature”概念を分析する。

文中敬称は省略し、引用は《 》、出典は[ ]、大本による注釈は( )で示した。また、旧字体の漢字は新字体にし、難読字にはふりがなを付した。なお、本紀要に順不同で連載している本連作論文「明治における「文学」(概念)の形成に関する国民国家論」(表内では「国民国家論」と省略)も節目の10回目を越えたため、現状における全体構成表を下記に示す。

\* 本学非常勤講師、近現代日本文学・思想 (Japanese Literature in 19-20<sup>th</sup> Centuries)

## 連続論文「明治における「文学」(概念)の形成に関する国民国家論」全体構成表

シリーズ名	論文内での 呼称	紀要題目	掲載号 (発行年)
序論	総論	国民国家論—「国語」または《出版語 print-languages》の創造と 「小説」の台頭—	10号2003 (2004)
「文学批評・ 研究」論	各論1-1	「英文学」研究者としての漱石・夏目金之助—国民国家論2—	11号2004 (2005)
	各論1-2-1	「文学」と「文学批評・研究」(1)—国民国家論8—	17号2010 (2011)
	各論1-2-2	「文学」と「文学批評・研究」(2)—国民国家論9—	18号2011 (2012)
国文学論	各論3-4	【本稿】1876年における国文学の胎動—国民国家論11—	20号2013 (2014)
	各論3-1	1890年における国文学の誕生—国民国家論4—	13号2006 (2007)
	各論3-2	1890年代における国文学カノンの形成—国民国家論5—	14号2007 (2008)
	各論3-3-1	20世紀初頭における国文学の展開(1)—国民国家論6—	15号2008 (2009)
小説論	各論5-1	明治初期における戯作者とその動向—国民国家論10—	19号2012 (2013)
詩歌論	各論4-1	日本における「詩」の源流としての「唱歌」の成立—国民国家論7—	16号2009 (2010)
作家論	各論2-1	日露戦争後の鷗外・森田太郎における「国家」と「文学」—国民 国家論3—	12号2005 (2006)

## 1. 万博と国民国家・日本の出発

まず、万博の歴史的な位置付けを見ておこう。万博の開催が本格化されるのは19世紀後半であるが、平野繁臣はその起源を中世ヨーロッパまでさかのぼる[平野:2]。平野は、自国の産物の優秀性を誇示するために1475年にルイ11世がロンドンで開催したフランス物産展示会を《近代的な博覧会の原型》に位置づけつつ[同:314]、17世紀から18世紀にかけて近代的な博覧会開催への気運が高まっていったと指摘している[同:2]。一方で、伊藤真美子は1797年におけるフランスの工業製品展示会にその起源を求めている[伊藤:12]。

一般に史上初の万博は、クリスタルパレスを会場として1851年に開催されたロンドン万博とされている。英国内で開催されていた新製品展示会が成功したことで、英国の王室芸術協会が国際規模の博覧会を企画したのである[平野:11]。この博覧会は爆発的な人気を博し、144日間の会期中に数百万人の入場者を集め、多大な利益を上げた。

ロンドン万博の大成功は海外からの見物人を大いに刺激し[同:13]、1853年には2つの万博が開催される。ひとつは、隣国アイルランドでのダブリン万博だ。もうひとつは、新興国・米国の財界人団体が自国での国際博覧会を呼びかけて実現した、米国初の万博、ニューヨーク万博である[同]。さらに、ロンドン万博の成功に刺激されたフランスは、5年ごとに開催されてきた国内博を廃止し、1855年、パリ万博を開催する[同:15]。以後、1862年・第2回ロンドン万博、1865年・ダブリン国際美術工芸博覧会、1867年・第2回パリ万博、1871-4年・第3回ロンドン万博、1873年・ウィーン万博、そして1876年・フィラデルフィア万博と次々に万博が開催されていく。19世紀にはなんと39回もの万博が開催される[同:18]。まさに万博の世紀である。

ところで、日本と万博のかかわりは幕末にさかのぼる。まず、先に触れた1853年のダブリン万博に日本製品が初めて登場した。しかし、現地にあった日本製の品物が出品物として展示されただけであり、幕府側からの主体的な参加ではなかった[同:13]。次は1862年で、駐日大使・ラザフォード=オールコック(Rutherford Alcock 1809-97)の手配により、修好条約関連交渉のため欧州に向かった文久使節団が、同年に開催されたロンドン博の開会式に参列したのだ[同:2]。この使節団には、福沢諭吉(1835-1901)や福地原一郎(1841-1906、各論1-2-2参照)も加わっており、サムライ日本人は注目を集めたようで、イギリス各地の訪問では地方新聞で報道されている[同:13]。この万博には、オールコックが蒐集した日本製の陶器、漆器、七宝、金細工、象嵌細工などが展示された[同:14]。また、1867年の第2回パリ万博には、幕府が渋沢栄一(1840-1921)らを含む徳川昭武(1853-1910、慶喜の弟)代表の使節団を送ったのみならず[西川:177]、薩摩藩、佐賀藩も独自に出品物を出している[山本光:238]。

維新以降では、1873(明6年)年のウィーン万博に明治政府としてはじめて出品する。そして、*An Outline History of Japanese Education* が出品された1876(明9年)年の米フィラデルフィア万博には、大久保利通(1830-78)を総裁、西郷従道(1843-1902、隆盛の弟)を副総裁に、合計84名を派遣した。明治政府は初の大事業として、巨額の資金を費やし、前例のない大きな規模でこの万博に臨んだのである[坂本:2]。

30 カ国以上が参加する盛大さだったフィラデルフィア万博開催の背景には、西洋文明の精華を吸収し、すでに西洋諸国と同等の万博を開催できる力を持っていることを世界に示そうという米国の野望があった[伊藤:23]。実際、この万博を機に新興米国の産業力と潜在能力は全世界に知れ渡ることとなり、米国の貿易量は一気に増大したのである[平野:30]。

このように明治以降、日本は各地で開催される万博に継続的に参加していくのだが、明治政府はなぜそれほどまでに万博に熱意を抱いたのだろうか。

先にあげた幕末の文久使節団に加わった淵辺徳藏(生没年不詳)は、自国の誇る産物を展示することで輸出を増やし利益を得ることが万博の目的である、と自著『欧行日記』に記している[同:169]。淵辺の言うよう

に、万博の機能としてはまず輸出促進があげられる。この機能について吉見俊哉は、万博は《様々なスペクタクルによって商品を幻想化していく資本主義の文化装置》であると明確に定義している[吉見:28-34]。すなわち万博とは、それぞれの国の産物をより付加価値の高い商品に演出する空間、つまり世界規模の「見本市」なのである。

けれども、海外物産「見本市」としての機能は万博の表面上の姿に過ぎない。伊藤は、万博をそれぞれの国民国家が自国のイメージを高めるための表現の場と位置づけ、その本質は《国家イメージの宣伝媒体》であると主張する[伊藤:3]。すなわち、出品物とその展示により《出品する国の有り様》を他国に伝えるという機能こそを万博の本質だとするのである[同:15]。このように、万博の真の機能は《国家イメージ》を海外に伝える場たることにある。いわば万博は「国民国家の見本市」なのである。

文部省も早々に万博のこの機能を見抜いていたらしく、『文部省第6年報』には《我カ国権ヲ振張スル》ためには《我邦固有ノ実力》を世界に示すことが《一良法》であり、万博において物品を展示しその用法を解説することは《良法中ノ一要件》であると綴られている[樋口:177-8]。

「国民国家の見本市」としての万博は、産業革命による文明化の成果を示す場であるとも言えるだろう。万博は《進歩とその結果もたらされた生産品の質を誇示する場》、すなわち《人類文明発展の里程標》的な存在なのである[平野:2]。それゆえ、万博において最も重要なのは各国の「文明度」なのだ。上記のフィラデルフィア万博の場合、米国は万博を通じて自国の「文明度」を海外に誇示し、その存在感を増大させることに成功した。

日本の場合、開国間もないという独自の事情がその万博参加に拍車をかけたと考えられる。不平等条約下において欧米諸国との外交関係において主導権を握れずにいた当時の日本政府にとって、欧米で開催される万国博覧会は《主体的に日本のありようを示すことのできる外交の場》でもあり[伊藤:15]、またとない自国宣伝の機会なのであった。そのため、万博で発信される日本像は、明治政府による国際社会認識に基づきつつも、そこに《将来ありたい自己》への願望がつけ加えられて再構成された《日本の理想像》となっていった[同:3]。

このように、対外戦略の主戦場たる万博において、日本はその「文明度」を誇示する必要性に迫られることになった。そして、それによって教育部門が重視されるという状況が生まれ、*An Outline History of Japanese Education* が誕生することになるのだが、その経緯は次節で見ることにする。

## 2. 文部省と *An Outline History of Japanese Education*

まず、フィラデルフィア万博に文部省が *An Outline History of Japanese Education* を出品するに至る経緯を追ってみよう。

まず注目すべきなのは、文部省と東京大学がその母体を同じくすることだ。明治初期における両者の設立過程について簡単にさらしておく。両者の母体は、幕府から接収した施設を基に1869(明2)年に設立された「大学校」である。大学校はすぐ、教育部門たる昌平黌(漢学・国学)に教育行政部門を加えた「大学本校」、開成所(洋学)を基にした「大学南校」、医学所(西洋医学)を出自とする「大学東校」の3校体制の「大学」

として再編される。ところが翌年、大学本校の教育部門は休止となる。そして、翌1871(明4)年、太政官布告第361「大学ヲ廢シ文部省ヲ被置候事」[内閣:287]により、大学本校の学校行政部門が「文部省」として独り立ちする。一方、南校は東京開成学校、東校は東京医学校と1874年に名称変更された後、1877(明10)年に法・理・医・文学部からなる総合大学「東京大学」となる。(各論3-1参照)

次に、文部省の設立当初の動向を見てみよう。初代文部卿(後の文部大臣)・大木喬任(1832-99)、文部大輔(後の文部事務次官)・江藤新平(1834-74)のもと、文部省は1872(明5)年に「学制」を發布し、翌年から全国に施行した。学制は、全国民への初等教育の普及と、欧米の文化水準に追いつくための高等教育の設立を目指したが、当時の日本の実情にそぐわず改正の必要性に迫られた[文部省1992]。封建制下とほとんど変わらない当時の社会状況下では公教育制度を組織することが難しく、1875(明8)年度の児童の就学状態は、名目で男女平均35%、出席状況勘案の実質では26%程度に過ぎなかったからだ[同]。

ところでこの時期、文部省の実質的責任者は田中不二麿(1845-1909、各論4-1参照)であった。田中は、海外の教育事情を視察するため文部省派遣で1871(明4)年の岩倉遣欧使節に加わる。1873(明6)年に帰国した田中は、文部大輔として学制の実施責任者となり、教育制度を改善し教育の基礎を固める任務を担う[文部省1981]。文部省雇員学監に着任した米国人・ダビッド・モルレー(David Murray 1830-1905)とともに、田中は1877(明10)年ごろから学制の改正作業を開始し、翌年「日本教育令案」を上申した[文部省1992]。翌1879(明12)年、この上申書を基づき「教育令」が公布される。結果、森章博の指摘するように、教育令の理念は田中とモルレーの教育観が強く表明されるものとなった[森:82]。そして、田中、モルレー両者は、フィラデルフィア万博と*An Outline History of Japanese Education*の刊行でも主役を演じることになる。

田中は上記欧米視察の結果を自著『理事功程』(1873-5)年にまとめているが、その冒頭で西欧各国が教育を重視していることを強調している[田中1873-5:巻1・上書]。欧米諸国を歴訪した田中は、国民国家における教育の重要性を痛感せざるを得なかったのだ。

田中は、国民国家間においては教育こそが「文明度」の指標であるということを理解したのだろう。そのことは1878(明11)年のパリ万博に関する報告書にも現れている。ここで田中は、『凡ソ一國ノ開不開ト人民ノ智トヲ知ルハ只教育ノ道如何ヲ見ルニ在ルノミ』と[樋口:177]、その国の教育が国民国家の「文明度」の指標となるという理念を提示している。

田中の目には万博が自国教育を海外に広報する絶好の機会と映った。このため、国内の教育環境整備に奔走する中、対外広報政策としてフィラデルフィア万博の準備に着手する。田中はこの万博に博覧会事務所の代表とは別に文部省独自のメンバーを派遣している[高田:21]。田中、モルレーの他、後に工業教育に尽力した手島精一(1850-1918)ら4名である。帰国後、田中は4巻からなる報告書『米百年期博覧会教育報告』(1877)を書く。この書によると、日本の教育関連展示物はスウェーデン、カナダに次ぐ分量であったという[田中1877:巻4・36]。

さらに文部省チームの目的は万博だけではなかった。メンバーは教育部門の準備や見学者説明などのかたわら、各国の教育事情調査をし、教育関連の国際会議への参加や教育視察などを精力的に行っているのである[樋口:175]。田中は、『万国教育家大会には毎回出席して、各国諸大家の論説を聴くの好機に接し、予も

亦本邦文化の景況、教育の方法を屢々議場に紹介するの榮譽を荷ひたり》と述懐している[水野:64]。フィラデルフィア万博への参加は、日本の教育を世界に開示する機会となっただけではなく、欧米における教育重視の実情を再認識する好機ともなったのである。

ところで、万博で教育部門が独立したのは3年前のウィーン万博からである[樋口:177]。そこで最も力が入れられたのが教育部門だった[西川:179]。それは、主たる観客であった市民階級にとって、教育こそが社会での成功を約束してくれるものであり、万博はそうした自分たちの世界観の体現だったからだとして西川智之は指摘している[同]。フィラデルフィア万博の場合も、会場本館の展示は鉱業、製造業、教育・科学の3部構成となっており[畑:38]、教育部門の扱いの大きさが知れよう。

自国の教育を西洋に示すための文部省の努力は無駄ではなかった。先の報告書で田中は、いくつかの新聞、雑誌に載った日本の教育展示についての記事の要約を紹介しているが、ある雑誌は《世界中、人民教育ノ<sup>にわか</sup>俄カ進歩セルハ日本ニ及ブ国無ク其ノ学校ノ制度ヲ示セル展示ハ殊ニ注目スルニ堪ヘタリ》と絶賛している[田中1877:巻4・38]。

ところで、これらの海外記事の要約を読むと、日本の教育事情を紹介するにあたり *An Outline History of Japanese Education* を参考にしていることがわかる。この書はフィラデルフィア万博から5年後のパリ万博にも再び出品され、准金賞を得ている[樋口:183]。高橋陽一は《欧米各国ともに学校教育制度の確立を目指す国際環境のなかで遅参しつつも古代からの学校教育の伝統を誇る内容であった》とこの書を評価している[高橋:110]。このように、日本の教育を通じてその「文明度」を世界に宣伝するという文部省のもくろみに、この英文書は大いに貢献したのである。

### 3. *An Outline History of Japanese Education* と “literature”

それでは *An Outline History of Japanese Education* の考察に入る。この書はモルレーの指導のもとに編纂され[森:75]、モルレーが英語で書いた “Introductory Chapter” と日本語原文を英訳した Chapter I ~VI、APPENDIX から構成される。Chapter I からIV (pp. 36-131) は漢(国/洋)学者・大槻修二(如電 1845-1931、大槻文彦の兄)が執筆、漢学者・<sup>なか</sup>那珂通高(1827-79)が補訂、Chapter V・VI (pp. 132-176) は国学者・榊原芳野(1832-1881)が執筆している。それらを、大学南校教官の米国人・グイド=フルベッキ(Guido F. Verbeck 1830-1898)の校閲のもと、英学者・<sup>おこつたろつ</sup>乙骨太郎乙(1842-1922)らが英訳している[Japanese:3-4]。なお、本書が発行された翌1877(明10)年、その日本語版が『日本教育史略』として同じく文部省から刊行されているが、以下、必要に応じてこの日本語版を参考にする。

さて、内容の検討に入る前に、“literature” および「文学」という言葉に関して下記のことを確認しておきたい。18世紀半ばまでの西洋諸語において、英語の “literature” と同起源の言葉は、学問一般、主としてギリシャ語・ラテン語による著作、およびそれらに関する教養をさす言葉として用いられてきたが(旧来的 “literature”)、18世紀後半以降、“literature” は我々の知る “literature”、すなわちそれぞれの国民国家(nation state)の言語(national language)で書かれた “national literature” をさす言葉へと変わっていった(今日的 “literature”)。(以上、各論1-2-1参照)

また、日本語の「文学」は、中国起源の「文学」は、明治以前、学問一般、主として漢学および漢詩とそれらに関する教養として用いられてきた(旧来的「文学」)が、明治以降、西洋由来の今日的“literature”の翻訳語としての用法が徐々に定着していった(今日的「文学」)。(以上、各論1-2-2参照)

それでは、本書において“literature”がどのように扱われているのかを探っていく。

まず、モルレーが執筆した英語原文の部分を見る。“INTRODUCTORY CHAPTER”(日本語版では「概言」)の冒頭には、この書を紹介する文として《The early history of education and literature in Japan》[Japanese:9]とある(下線大本、以下同じ)。“education”と併記されていることからわかるように、ここでは学問一般をさす旧来的“literature”の意味で用いられている。この部分は日本語版では《日本ノ教育及文学ノ古史》と訳されており[文部省 1877:1]、やはり旧来的用法の「文学」だ。また、子どもが手習いに読むべき書のひとつとして《Kobun(New Treasures from Old Literature)》があげられている箇所がある[Japanese:13]。日本語版には「文学」の語はなく、初学者用の詩文選集《古文真宝》になっていることからわかるように[文部省 1877:10]、これも漢籍をさす旧来的用法だ。

次に日本語原文の部分も見てみよう。応神天皇の息子が朝鮮から渡来した王仁から“the Chinese classics and histories”の教授を受けたというくだりに、“this was the commencement of the study of literature in this country ”、これが我が国における“literature”の始まりである、とある[Japanese:38]。日本語版ではここは《経是學術ノ始ナリ》となっており[文部省:56]、この“literature”も旧来的用法であることがわかる。このように、この書で使われている“literature”のほとんどが旧来的用法である。これはモルレーおよびフルベッキが“literature”を基本的に旧来的な語義に解釈していることの現れでもあり、おそらくそれは当時の欧米知識人の間での一般的用法を反映している。

一方で、旧来の枠をやや出た用法も散見される。まず、日本語原文の部分で《In ancient times in Japan native learning was not cultivated》と、漢学との比較で日本および日本語に関する学問が《native learning》と呼ばれている部分がある[Japanese:96]。続く部分でも《When Chinese learning had made much progress in Japan the native literature was made to imitate it》と[同:96]、《native literature》が《native learning》と同義で用いられている。さらに、英語原文の部分にも《a valuable collection of foreign as well as native literature》という表記が見られる[Japanese:34]。

旧来的用法では、漢籍およびそれに関する学問が“literature”であり、日本関連の学問が“literature”と呼ばれることはない。実際日本語版では、ここは単に《日本及支那ノ書籍》[文部省 1877:50]となっている。これに対して、これらの箇所の英語“literature”には、中国の学問に対し、日本の学問という発想がうかがえる。これらの《native literature》という用法には、国民国家それぞれの“literature”という理念が流れ込んでいるのである。「国学」が《A school of Japanese literature》と呼ばれるのも[Japanese:95]、オランダ語や蘭学が《Dutch language and literature》と表現されるのも[同:100]、同様の理念による。

この理念は、師範学校の教科のひとつが《Japanese and Chinese literature》と書かれていることにも現れている[堂:24]。ここは日本語版でも《日本及支那文学(習字、読書、作文)》となっている[文部省 1877:30]。また、《University of Tokio》の科目名にも《English literature》とあり[Japanese:29]、日

本語版でも《英文学》となっている[文部省 1877:41]。ここにも国民国家ごとの“literature”という理念が反映されている。

当時、欧米諸国の諸学校では、旧来的“literature”たるギリシア語・ラテン語をめぐる学習に加えて、「俗語」たるそれぞれの国民国家の言語(national language)とその言語で書かれた文章(national literature)について学ぶ教科が生まれていた。それは、当時の西洋諸国における自国語たる俗語に関する関心と教育熱が高まりの結果である。その事実、先にあげた田中の『理事巧程』にもよく現れている。この報告書のフランス編で田中は、《アンスタチュ、ド、フランス》を《國中ノ碩学者ヲ集メ諸學術、文学、理学等ヲ研究スル所ナリ》と紹介し、その分局として《アカデミー、フランセーズ》をあげ、ここではもっぱらフランス語を研究し、辞書を編集していると解説している[田中 1873-5:巻4・21]。こういう俗語を尊重する機運は下位の学校にも広がりを見せていたらしく、フランスの小学校には《仏国語学階梯》という科目があり[同:巻4・39]、《上等小学校》には英語、イタリア語などの科目があると報告されている[同:巻4・9]。

他にもドイツ編には、ベルリンの日曜学校や夜学校に英仏独《文学》の講座があると記されている[同:巻9・5]。また、高等女子学校の科目として《独乙及ヒ其文学》《仏及ヒ其文学》とある[同:巻11・37]。その一方で、師範学校の語学の項には《旧時ノ独乙詩文》を[同:巻9・35]、《生徒ノ習読ノ個條ヨリ省》き、修身に関する書物に代えたとあり[同:巻9・28]、いまだ俗語たるドイツ語による書き物に対する蔑視が散見される。

また、米国編には大学入試科目として《英文典》がある[同:巻1・39]。さらに大学の《今代語学》の科目として、フランス語、イタリア語などのみならず[同:巻2・54]、《英吉利詩文学》とある[同:巻2・55]。これらの語学をめぐる状況からは、それぞれの国民国家の言語としての俗語の地位向上に伴って、俗語で書かれた“literature”という概念が登場しつつあった状況が管見される。

こうして生まれる、それぞれの国民国家とその言語をめぐる科目としての“literature”では、それぞれの国民国家の言語による文章が教材として使われていくだろう。そして、教材にはそれぞれの国民国家の言語による小説や詩が必然的に登場する。実際田中は、ドイツの中学におけるドイツ語による《素読》の授業要綱として、《総テ教授スル所ノ詩歌文章トモニ童子ノ智ヲ益シ心ヲ和クルモノヲ選ミ且有名ナル詩人ノ時代ト文学ノ要領ヲ併セ教フ》と報告している[同:巻11・24]。これなどは、まさに今日的な意味での“literature”の授業風景である。

こうして、学校教科としての“literature”は、やがてその国民国家の言語およびそれらの言語で書かれた小説や詩を学ぶ科目という今日的語義を帯びていくことになる。日本においても同様に、学校の科目としての「文学」が今日的「文学」概念を広げる点で大きな貢献をしていくことになる。

それでは、*An Outline History of Japanese Education*に戻り、“literature”が明確に今日的な語義で用いられている部分を見る。

まず、詩歌である。日本語原文部分にはこうある。



Metrical composition. —Poetry has existed from the most ancient times, … Poetry or song is generally understood to be delivered in audible intoned cadence; but, since the middle ages (Japanese), poetry has been divided into two kinds, the one being simply read, while the other kind is sung. The latter kind consisted of Kagura, Saibara, Imaiyo, Yo-kiyoku, etc., while the former developed into a distant subject of literary art …[Japanese:141]

本来、「詩」といえば漢詩のことであり、和歌は「歌」であり、「詩」と呼ばれることはなかった(各論 4-1 参照)。ここでは、日本語による《Metrical composition》(日本語版では単に《歌》[文部省 1877:255-6])が《poetry》、《literary art》(日本語版では《文芸》[同])と呼ばれるのは今日的“literature”の語義にはほかならない

次に、小説についてだ。モルレーの英語原文箇所こうある。

The ancient literature of Japan consisted mainly of works on history and philosophy, together with poetry and works of fiction. … Works of fiction were extensively read by all classes, especially by females. Under the impulse created by the opening of the country to foreigners, a strong desire sprang up to obtain a knowledge of foreign countries and foreign laws and customs. It may be safely asserted that the new literature in Japan is now chiefly directed to the supply of this want. [Japanese:33]

日本語版でもここは

日本古代ノ文学ト称スル者ハ専ラ歴史理学詩武小説ノ類ニシテ…小説ハ靡ク衆人ノ読ムモノニシテ殊ニ婦女子ノ好ムモノ多シ外国ト交際ヲ開テ邦人ノ氣ヲ鼓動セシ以来外国ノ學術及外国ノ法律風俗ヲ知ントスルノ志望極テ盛ナリ故ニ目今日本ノ文学ハ此需要ニ応センカ為ニ其方向ヲ転スルト云モ可ナリ[文部省 1877:47-8]

となっており、“literature”に対応する形で「文学」が用いられている。

ここにある《a knowledge of foreign countries and foreign laws and customs》、西洋の学術や法律、風俗への興味を軸に書かれる小説とは、『西洋道中膝栗毛』(1870-6)や『安愚楽鍋』(1871)などの戯作だろう。ここでモルレーは、“literature”・「文学」に小説を含めているが、いうまでもなく小説を“literature”・「文学」と呼ぶのはきわめて今日的な用法である(各論 5-1 参照)。

他にも日本語原文部分において、《Monogatari (Light literature)》の代表として『伊勢物語』と『源氏物語』があげられている[Japanese:140]。ここからは少なくとも英米圏においては、“light”を冠しつつも小説を“literature”と考える習慣が根付いていたことがうかがえる。

以上のように、*An Outline History of Japanese Education* における“literature”概念は、学問一般という旧来の語義を主としつつも、当時の西欧における用法を反映する形で、詩歌・小説をも含んだ今日的な語義を内包したものとなっているのである。

## おわりに

中山茂は東京(帝国)大学を海にすむ雌の怪物・リヴァイアサンにたとえているが[中山:2] (各論3-1 参照)、東京大学と姉弟である文部省は、同じ海にすむ北歐の怪物・クラークンになぞらえ得る。タコやイカに似るクラークンは、ふだんは海にその姿をひそめているが、船乗りらは航海時、常にその存在を意識し恐れていたという。文部省もその姿をさらすことこそ稀であるが、全国の諸学校を支配し操ってゆく。

1886(明 19)年、文部省は『日本教育史略』を各府県の師範学校の教科書として採用する[山本正:151]。*An Outline History of Japanese Education* のまいた今日的「文学」概念の種子は、この教科書を学んだ師範学校卒の教員を通じて国民に植えつけられていく。一方で、この種子は東京(帝国)大学を母体としても育ち、やがて「国文学」として生まれ出ることになるだろう (各論3-1 参照)。

## 参考文献

- ・ 榊原芳野(1878)『文芸類纂』文部省
- ・ 伊藤真美子(2008)『明治日本と万国博覧会』吉川弘文堂
- ・ 坂本久子(2007)「日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会とウィーン万国博覧会の関連」『デザイン学研究 研究発表大会概要集・第54号』日本デザイン学会
- ・ 高田麻美(2010)「田中不二麻呂による博物館情報の摂取」『教育論叢・第53号』名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻
- ・ 高橋陽一(2002)「日本教育史学の成立と国学—日本教育史略、文芸類纂、古事類苑、日本教育史の関係—」『明治聖徳記念学会紀要・復刊第47号』明治聖徳記念学会
- ・ 田中不二麿(1873-5)『理事功程』文部省
- ・ ——(1877)『米国百年期博覧会教育報告』文部省
- ・ 内閣官報局(1888)『法令全書・明治4年』内閣官報局
- ・ 中山茂(1978)『帝国大学の誕生』中央公論社
- ・ 西川智之「ウィーンのジャポニスム—1873年のウィーン万国博覧会」『言語文化論集・第27巻2号』名古屋大学
- ・ 畑智子(1997)「19世紀の万国博覧会における「日本」の展示空間—1876年フィラデルフィア博を中心—」『デザイン学研究』日本デザイン学会
- ・ 水野節夫(1997)「田中不二麻呂と「教育令」制定」『中京大学教養論叢・38巻1号』中京大学教養部
- ・ 森章博(1967)「明治教育思想の再検討」『キリスト教社会問題研究・11号』同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会

- ・ 文部省(1877)『日本教育史略』文部省
- ・ ——(1981)「近代教育制度の創始」『学制百年史』文部省(文部科学省HP:  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317567.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317567.htm))
- ・ ——(1992)「近代教育制度の創始」『学制百二十年史』文部省(文部科学省  
HP:[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318227.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318227.htm))
- ・ 樋口いずみ(2009)「1878年パリ万国博覧会と日本の教育部門への参加」『早稲田大学大学院教育学研究  
科紀要・別冊第16号2』早稲田大学大学院教育学研究科
- ・ 平野繁臣(1999)『国際博覧会歴史事典』内山工房
- ・ 山本正身(2003)「日本教育史学の中の近世儒学思想」『哲学・第109集』慶応義塾大学
- ・ 山本光雄(1970)『日本博覧会史』理想社
- ・ 吉見俊哉(1992)『博覧会の政治学—まなざしの近代』中央公論社
- ・ Japanese Department of Education. 1876. *An Outline History of Japanese Education*. D. Appleton  
and Company. HP: International Archive